

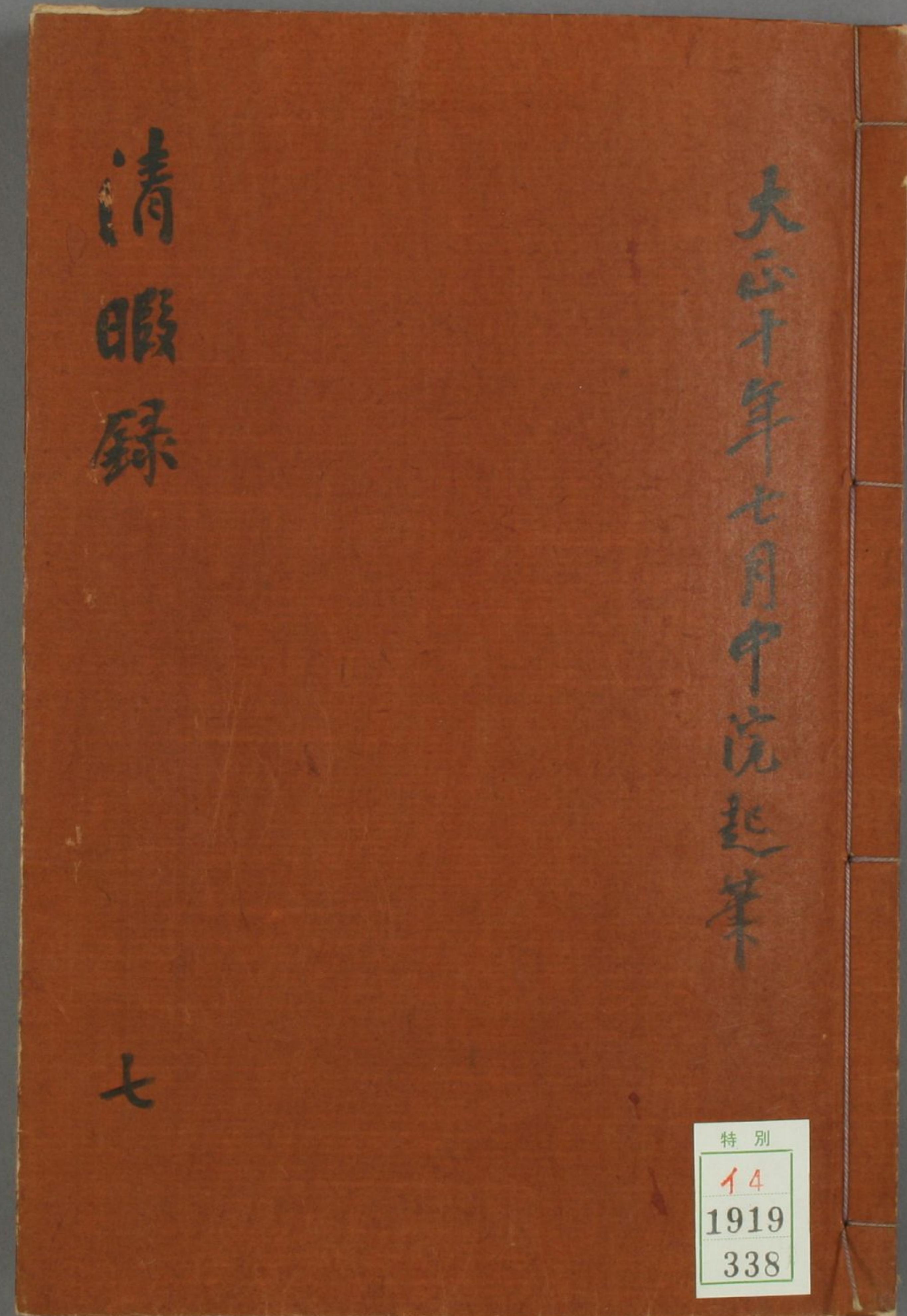
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

大正十年七月十日迄年

特別  
14  
1919  
338

清賬錄

七



38- 9127

洁殿松七

七月廿三日起筆

○而前此碑文の生誕地碑とまつて自古  
千年傳つて居る碑文をありあるも、其基を漢  
文と用ひず今も圓字の文ある事に之を以て  
一これ以後の碑文を後れてうそいことう容易  
の事である、後れの碑文もき方の變りを常有  
文うへるものと見て得るやうである、今この碑文  
和洋ものか又もあらずともうう事もそ  
うの時又七歳である、文体は一風と要す

3. 城内も直進するが何處へ之を以て未だヌ文体未  
だ有る、但此等は進の後又絶ひ、固のみ又相丈も  
西洋より獨創修む者多く例へある。漢字を  
少しこそと見しれ考究。諸も易く之を能こと  
丈重清以此先之角一应文を可して之に上じ  
けられハ自今之主張すよるゝから多ひ。是を云  
奴。

○早稲田の生改部から、大至利多を元  
あ頃うきつい、此の半季の純益、七八萬円  
上云。株主と云ふ者も大山さきの程度ひきこもる。此の  
全部を配当する事あり得ぬ。且主つて  
はるま。且つ大至利多は税の負担ある所

ら、あとも現在の十萬円のうち化を二十万円を  
償済すべしと云ふ業を実行する北秋である  
と内都は協調つたうべ、即ち利益金を株主に  
財務者全員とし分配して、その全額を博資に拂  
まし、これハ又ナ内株の半額拂入とす。併し株  
主の八分通りと比る段費負ひあり又幹部の職  
務もひきとどく然子全員とも一とて監督する所  
敢て差支えのう、早大と云ふ株主の名もとも社  
号を冠する者あり、早大、寄附するこ  
とより、拠て早大の持株をあすむ増株也  
ゆ之れと拝込ましあること化の株主の数はえん々  
ア若もさう二十未の株式と云ふ、モレモんう株

主の総合で決する。財務金を破つゝして合併があ  
るが、その方法は、もう出版部と擴張する、と現までの  
利益ももううけるべきである。運営の運営も、緊要ひ、  
此の好機に活用して、より社会と親しくべきである。  
此の文化年間村瀬榜亭の博打と、儒道博徳論  
放翁詩選と坊間を得て日々復々恥げてゐる。  
宋人の詩の中でも自今を東坡と放翁の詩うべ  
む言に立てる。胸中相打劫のある人ひろげん  
ハ麻譚本而向うくらひ、個性の人の詩を重んじ  
氣子あう含蓄もあうのが毎詩生氣を廻し  
えます柏葉三歎するりうひや能うのわら放  
翁の詩を擧げて興味を試してどうぞこの詩是

善あらむらし弱る豈すひあるまゝ別々興を  
感やしてらます。うきい放翁を東坡とあつて  
酒うぬきもあうにあへて酒詩う甚ひ多く、之  
にて其の石林院の氣を吐きぬと見えやうと大  
酒詩があるに感して、全体酒と其劫とお  
釣り可う者ひ酒を難うて漏るを石林院  
一ふとが揮する、已みを殊に放翁の酒詩と  
愛す、敢てぬか所と偽るを御ひと云  
○宗家の親戚ちに仁兵衛もとす若太陽房  
年表二冊と題する、後来の大陰房年表とま  
で太陽房と引取てたものか、西洋の年代と歴史  
すま便利ひきと言ふまじゆうのう、さうの骨

のあれにはうて、どうもうきつてのけひとと其の鳥志  
ス感しに、帰し田舎に引取して考へ仕事も免  
じまと固陋や審度の心もん考う様をやふ。ち  
頃の北の芳の如き、ニ正宗後を金科玉條とし  
飽ましれス被り、ニ正宗後を宣撫ひある。う  
くとえひ立モ疑を揮すらうと云ふが、  
實を此の徐後もと種々の誤りのあること、唐  
子の改ニキアリ多き、あんまりの苦辛と昇  
月を滿る位うらば、却かに出來る有宿るヌお暮  
の坊間で布先徒要と署して珍本六冊を得て、これ  
をや精店中のものとし、これをぬ汝九郎福錦某の

落葉：像り、ぬ汝四年（一七〇七）年ともさむの江布  
先をあつめにわ木版の整版じゆうよ念入の  
せのひある。卷首：宝慶本一六の「使君使ゆ」の語言  
うあうあ引も一冊添つて居る。日本本の河狐三年  
とある。北山もと初めと見る所ひ多く、元法今こ枝を  
用ひと云ひ、當時布先と云ひ整版うち一冊を  
新物幼ひ其の布先は淡石と血つ味を感するもの  
うゆるゝもの、當時布先と云ひ整版うち一冊  
とあつて珍り、御能清雅余金にあらず觀念う今  
いも、辛然たれどもかえり候るものである。う  
す本中、北無る（うらう）といひ。

○名家山簡五十色計と絃の如く之を帳と考へて  
多の有り、山簡故隣も甚都を全部も手にし  
ておる事無しと考へておる事無しと考へておる事  
無しと考へておる事無しと考へておる事無しと考へておる事  
左の如

大正十年七月廿四

隆日 勤翁益田 竹谷 蘭更倅人  
董本義齋 関克内 谷文一 三亥  
祐闇 隆古 桂山 母方生方  
蔣塘 有元如 三井 李所 楠生  
石室 黄潤雨 五山 林山  
毛蘋 達政 町田 達翁 葵孔  
弘佛 膳甫 条山 菩宣

文昆 古葉 了吉 無幻 寧峯  
懷窓 摺山 陽雲 茂又 寒素  
一舟 遠翁 下二山 在中平乘西馬、  
印石の如く未保而假二三あり

○時事半顯ゆ亦キヨモチ可れんが為先と併せて轉化  
保養の体不採うれに先が逐子・摺色と名取事に入  
りて再び之を傳仰つゝある事とあらざる事なる  
か一室もうとえふとは非自こへて却てつう  
めやと聞く事多き也何より都度ほんぬもえふよ  
夫即ち、家や角も少く一泊丈々幸ひ又一室の海  
をえ所もあらじ家とすれどもとせめど

トシテ總の後而や自動車と驅り至る山に到り  
ちあ國へ前より後してと間へバタチ又前より  
至るよしと申し美ら旅亭にて處す。此旅館之主  
山根坐在世の間も此を唯一の旅の宿ともせられ  
「僅うる四五のものあり極めし小屋より之を極室  
「別荘と申してはもう一室と造り深くて時々免  
「またまた豪傑と申すと申す一ト間をやして場所  
「などと立ち、其の上にあまをすすりて居やし  
「とさうしがうち株式組合と申して御る規模で今  
「つまとうと申すが、其の上にあまを何と申すや  
「と推測する出来事の仕事と申しては、ハモ  
「れどもあれども今も無しと信ひます」

リタマの山、急山、山が前路の引立木地蔵院の山  
まじ別荘棟とろもへて連続する方舟も真で  
森の木もさわづかずある、美ら旅亭にて處す  
こめきことわざく、フト思ひ出でるが前路の別  
りおれと申す。この向い御のスー方舟、うつは  
男の碑文のねむねと申す。第一紀念をゆゑたる  
土地を大殿と叙し、不思ひうつへて、又三木  
湯にすニふきまわき改めしまたどう何分偽  
名本位の一種開創而文、自らと申すと聞えども、  
久、ハ難きいふるの上に、象牙角、金銀、鉛、  
示すの材料とさすことをいふる、るほやうの角  
、建碑の接住るほの場のうに接するが、狀教

七月廿九日  
晴

○此處の大洲堅と太平洋、河堅でもある、全体太平洋  
河堅も日本、主催者あひらまゆきのものもあります  
左もうちれども被えに見えぬ、うるさく、行う

動機とさうしたとまくぐの出来事の笑ふて仕切るの新  
の行はう、米田と乳をもしての事う、動機ひ、日吳あ  
四の東泰と東ちゃんの却つて相馬田元へは不お泰  
ヨ附りつてある、而しも善とつむ相手に四ま起つんとす

とて同學せりやうかり

海外時事

太平洋會議に關する新聞の報道は、最も盡きてゐる形だが、總括して今迄の經過を暫いて見ろ。この議の眞の發案者は英國で、同國が

動機とううんとうくぐの英日の戦争の新  
の行はるま、米國と争ひしもの事。うう動機は、日英あ  
四人の泰と東さんよ！ 却つて相手圓えんに不お泰  
ヨ蘭うつても、而も主とつて相手圓、もう起つんとす  
きと同泰セウツカリ  
とへ晋軍不ヤスニ  
全体日支のゆでセウ  
足りる多室の上ヌ格  
列の難味の無いもの  
わざあまうよ、えん行  
き松ちと駕んる米  
圓と北洋アドラム

海外時事

太平洋會議

早わかり

□太平洋會議に關する新聞の報道  
言説は最う雄きてゐる形だが、總括的今迄の経過を書いて見る。この會議の眞の發案者は英國で、同國がこの考を起したのは今も尙引續き開かれである。例の英帝國首脣會議で日本同盟の更新問題に就いて殖民地側に異論が多く、一寸直ぐには改締が六ヶしさうな形勢になつたので、謂はゞその局面展開策としてこの會議を開く所へかつて來て殖・地以外に英國内下もこの米國の不穏嫌までも侵して今急に日英同盟を改締するにも當るまいといふ議論が出て來た。改締をするにしても、日英米の間に先づ了解を遂けた上で、それに觸れない範囲でやれといふのだ。

□日本政府としてはもう腹は決め居るやうだ。山東問題やヤップ島問題は、その局面展開策としてこの會議に寄りくに相談して決めやうといふのだ。

□日本政府としてはもう腹は決め居るやうだ。山東問題やヤップ島問題は、ゲエルサイユ條約で既決の問題であるから、これにより決めるものとし、西伯利問題にしても會議前に撤兵してチタ政府と通商開始に依り提議し、さてこそ米國の「軍備制限」に及極東及太平洋に關する會議」らしいの暴風雨を孕んでゐる。

□英國が日英同盟改締を躊躇した他の有力な理由は米國への氣がねだ。何んな形でも米國は日英同盟を喜ばない。その第一の理由は米國は日本同盟と日英兩國の海軍を引離して考へる事が出來ない。大西洋には英

# 海外時事

## 太平洋會議

### 早わかり

□ 太平洋會議 に關する新聞の報道  
言説は最う盡きてゐる形だが、總括的には今迄の經過を書いて見る。この會議の眞の發案者は英國で、同國がこの考を起したのは今も尙引續き開かれてゐる例の英帝國首相會議で日本同盟の更新問題に就いて殖民地側に異論が多く、一寸直ぐには改締が六ヶしさうな形勢になつたので、謂はゞその局面展開策としてこの會議を思ひ立つたものだ。

□ 英國が日英同盟改訂を躊躇した他の有力な理由は米國への氣がねだ。何んな形でも米國は日英同盟を喜ばない。その第一の理由は米國は日本同盟と日英兩國の海軍を引離して考へる事が出來ない。大西洋には英

國海軍、太平洋には日本海軍があつて、條約表面の理由は何うあらうとも、不言の間にこの二大海軍が策應する可能性があるものと、馬鹿々々しい程氣を廻す。

□ 第二の理由は條約文面の骨子となる支那の領土保全、機會均等、門戸開放といふやうな事を日英兩國許りで條約によつて特に宣言する事が米國には氣に喰はぬのだ。

□ 所へ來て殖民地以外に英國内でもこの米國の不穢嫌までも侵して今急に日英同盟を改締するにも當るまいといふ議論が出て來た。改締をするにしても、日英米の間に先づ了解を遂げた上で、それに觸れない範圍でやれといふのだ。

□ この形勢を觀た英國政府は、恰度この時米國政府に軍備制限會議<sup>相集</sup>の意あるを知つてそれを關聯して極東に關する會議を開いては何うかと提議し、さてこそ米國の「軍備制限」に及極東及太平洋に關する會議」といの暴風雨を孕んでゐる。

□ 所で會議の内容と問題の範囲だが今迄のところでは未だ漠然として決つてゐない。英米とも腹をがないらつし。これ程重大な大會議を招集するのに、會議の議題に就いて何等の具體案もないといふのは一寸ヘンだ。これが事實はさうだ。これから參加團で

□ 日本政府としてはもう腹は決めて居るやうだ。山東問題やヤップ島問題はゲエルサイユ條約で既決の問題であるから、これにより決めるものとし、西伯利問題にしても會議前に撤兵してチタ政府と通商開始に依り解決したこにして了ふつもりらしい。併し之は日本から見ただけの解決で向ふでは何うか見るか分らぬ。要するに平太問題はその名に似ず幾多

主より不局すあひ、英國の費用目がめりて減つたるこ  
れを従つて七日見る内に米國よりより英支の強敵で  
あるとおもふ。

七月廿二日

○終り雨に泣きし放翁集を读ひすゑ足を痛  
いて快外を叫び杯を呼ぶ

孤家醜酒三千石閑愁萬斛酒不敵今朝  
醉眼爛眼電提筆一顧天地窄忽如揮  
拂不自知風雪入懷天傍力神龍之體野  
客露腥青鬼擅山太陰黑此時耻老胸  
中愁越牀大叫狂脫憤呂股蜀素不快  
人付此方其三犬望

放翁の酒快外を呼べりよしとし翁に快を乞

○翁の一柄を傳けん老く忍ち承倒也  
○全廉へ一喝前は翁は延紀翁碑を刻  
せんとす。文多、初稿を寄て来る、大体で於て  
可りまし、固有名詞即ち傳縁と附し、次文多の  
外す。この後もとすて後世祀能ともべき歎  
る點あると寫すものす。

今北碑の三つ家より一八三五年の月日  
又生ん生じ廣正郎と云ふ。少兒が我等の  
男等前島旅居ひあり、浦川や下田、  
外國の船が初めて来た後、十四歳ひ江  
月、出て、昔そのそとぞれ西洋の上の氣云

と修めし徳川政府に付へ、つゝりて明治政府に用ひられんとして、あの维新の大變事業に伴ふ制が文政の改善に、非常の貢献をもたらす。郵便も電話も汽船も鉄道も開拓も、はこの人の賜である。日夜勤めの起とぬやうな京金銀も、とえ國々のものせば、ひち協れる不眞面目に、貧乏の官職を削除せり。その間の権主の力不足早急のたるを因めにも、北へひどく、まく車馬で都と遷することを聞く出でしりが、實に北人に見る。いつも見ゆる如きと、着て見る方法は、熱誠を努力とし、一身に傷へし長じ比へ。

八十才の長壽にして、お様の芦名村  
で眠るやうに近づく。身の内を嘆み、死と  
田舎へ格あひてゐる。

○本草中錄木版之血脈の図姓印三中本草古  
ひび原のマクリ四枚とどうりもあら、厚塗油  
に於て煮山ひわらし、うね歌を大むし

夏雪

夏雪とあひとうをかきう  
ちくわあくい 細の水無月

早崩

さゝごとくひの腰すやうへの／＼と／＼と  
女の禮のおそきと／＼も

雪

いはねとぬまと味ぬをあけり

豆てと／＼とま雪の塔原

初秋

まみれんと尾先うもとく主よみば

ルセとくとよとあみるの月

のる牛込長き左の通牒刊

鹿取の六七鶴

東京都市牛込区東五軒町卅卫番地所在(龍藏家屋)  
九月十三。内閣ノ認可公告有立候。本賣不外有前  
記家屋ノ右事業用土地ノ境域内ニ相あス。右  
右ノニ就て左記の事項凡と注言。拂後解有  
すモ無也。也

近ニ該計畫ノ圖面ノ申請所ニ有之候。行閱變  
一ノ供候

記

右市公用土地ノ境域内ニ於テ工作為ミ新築改  
築若クリ除々レ又ハ土地ノ形質を更変アレ  
ト時ハ

卷之三

二 其他の予定は元氣であります

の徳すと竟せんし昂し也すと竟せんし  
の行為をすと竟せんし御承認此又は事務所ひき  
至れり四條と余セムコト可有也

大二十年七月廿九日

市に改まつたは薩摩の地域に遺留の機知をもつて  
而て耳のやうが余る所へ在り往々有利焉  
感歎所に動き御室の二説を要す

○三段法帖三帖を得、もう日本法書架十のあとは  
まいし、北の法書西村藏元毛の利する所あり

卷首各用角字すみにんじ作記文元年  
正月行定（廣重の印）以松本体（刻）  
しも、さるろハシ（形）牛もろえの  
ねのう佑記（又）ももえの前  
と異（卷尾）勝高蓋（家）の断句（行）因  
其金剛（大）哥渡印（有）卷尾太田錦  
城西村義（也）もの後（有）三段の法を世に流布  
すまのまく杜撰（也）えん敷（其）而自を立  
ト

日日入山書畫局  
如今書畫已化  
也多小而無抑  
名成才本于人也  
惟余張士  
琅有如仙皎立  
於雲上

考寔亦汚跡略致あり、少頃卒すのあとより是より久終失雪を重ね自卓の紀行更刻錄一冊をおも全り體をとめず、一元正月廿二日午前未サニヨリ行の鴻糸を行を歴き先づ江戸ヨリ、又よ化其事もあつて終ニ吾紙終に入リ、二十六日中の旅程紀すう例の通義の摺也、テ漢文とある記述を悉く一也也他に佛り精説と物主トシ。

七月廿九日

○北側の波の間大半鉛木牧之の家と秋山紀行、宇石二冊傳つまむれ著、より佛り精説入此の秋山紀行とまじて、吉山の手簡やる牧之ともモモえふ々の事も見え、牧之う出版をまゆどります。

さう、まことに秋山と云ふは何の意だ、と云ふやうすが、居て、いれど、の行ふことを多く信頼の度にあら人跡うちと稀なる深山の小村處をすること始めしむんぢう、る丸なりうと牧之の紀行もと、いじ十通余一丸う紙済こありし、お牧之の一段、於木牧山をばの天政二年辰、年の秋もよの、漫良と活して、まほく、路済一丸おの紀行、こえり、十五(金)一丸芳と牧之のち、済へあらと云ふ中絶とや既に御あまとく、どうどもあら、保し高嶺の僻脈地と云ふ考もす所るひと、潤もあらずとも、うえも下り、唯此ここの物もアキ

ハ一九の著述をもは一九みづく三版入るを不んら  
わむる不絶其後牧之敗ふるゝ、せばよき  
べきも、之れ日と土をもすもあきらめしと今迄も  
なむ何から、此の行もの上尾も、牧之の本  
ヨシニ三ねどあるも狀あり、元名を古くうな  
詠の、都を、わゆたまどゆこ此の施行の  
若也と耕みたまえ、真遂う一九の込と  
東山に作り、こよと耕じ七十五ド、あるよ  
べし、此二冊の物を之の跡の集のうち  
どすのや、美濃紙五十枚もとの、と、乾伸  
二冊。

七月三十日

○青木國印譜の富山墨吹の刻すまふ也余前

日五冊を得て、筆中にて實取、日本印史の卷有資  
料、えつ、北種の印譜、宣を一部を有する乃う達  
コ歎て、多念、金と、置て、もと、ひる又内容曰し  
うる、此冊本一部を得たり、前あると、共に蓋  
田香遠の義の花と、屬す、香遠の家に此人の印  
譜自云、印譜と、名す、之を、他に北人の摹  
写し、印譜、元干あると、之が、蓋田家を北人と  
思ひ可りしに似たり、ゆる得て、印譜、之より、得  
り、之は、較へん、形、穀々小、して、東江源、鱗の、  
名を、刻、此印譜、數と、ぬめ、往候、印焉、  
多し、前者と別つ、為りましんと、青木國印  
存と、凡つて、此刻、焉、を、傳、傳の印を、鉛を、刻

(金  
印鷹とそれが上様にさうとうつてゐる  
家にひき、余ある此印鷹をえり、あら初引  
ひのあるヒ印鷹時を以て硯味の刻あらと考  
像せしと、刻とえんば其芙蓉にさうらむ従て其  
墨と磨くまでもうす、決して抜手りあるまい  
世へ玉印鷹を知り、他の印鷹を見てもその多  
余の筆やヨニ種ありあらわし寫めと手のよ  
や不の良いもあらざとのあめの氣入り泥と  
吐くかの歎

○初でニ業代生部に持て二三友人と手紙をせし  
冬常をえど、めづる物に假せりやうと設局よ  
くらむ地せず、五洋を計十五、三十の窮屈

日記

リ上中下と茅屋ありの上茅屋もニ家あらぬ  
室使不然家一泊價十九日地をきくニ家或ち  
一室を養ふを附く、寝をもと説く一泊十日八  
玉内をえ下内を、玉内に家をもあらゆのより  
也、赤四階主と演義坊り、名前をも説く約束  
人と容えしあるをも年紀也、三階主大名事  
あら、四階二階、廊路三三五々食すま所満也  
家寺す、日外浪兵を以て上です、此程家  
部の五年前、工業、圓体うえをうう次第を教し  
て是を以て本主うつたる四十萬円、ともに日  
坐の入を年を以てし合あるともと得  
しと、大段の便を却てほまれハ観摸甘以夫

也、日本に於ては未一と有らず、

同上記

○宋元本書自行格表上下二卷四冊 吳縣江建霞  
著す所、書史に要用りし也。此本余未之見  
す、前年文求堂氏言本を售りしことあるも得  
得すとしてみぬ、此後上海にも多くの石印本を  
入手し、輸入來る、中より北の一書を則ち購ひて  
卷首に元祐丁酉劉肇陽の題序あり 同上記  
○波間の錦十二枚の流止年得能良久印刷局  
在龍門石版とも刷行せしもの、當時石版印刷  
本邦に始めて行はれ、印刷局は特に素を用いて此術  
研鑽し大なり、粒を極めり、此の通譯と云ふ  
之れにて日々實物を魚河岸とも取寄せ、更

と摸写して之より外、又墨のとくとくは奥氣を  
且つ変化もありとくを以て模写を終ふといひ角  
田内一の魚を購ひてれば、こつ豆きりとく同高、  
奉賜也。さて酒の所、此の通譯の粒を極め此  
がうそ今時の石版や或う之んとての概  
あり、印刷局のこゝらる珍本と多く要すと  
頗り出でんべ、賣り下けとあさり且田内の一  
部以上拂下けられ、其の後、珍本とて玩み、利する、此ちの  
印刷の歴史の標本とて得るモリ也。一也  
印刷局も拂下の合と、プレートをうちみる  
よども之をもねば、此帆に當る事あらしある、卷

尾に魚名并にありの解説あり

曰上記

印倒向と排印は馬をめの後方の和風既み朝  
陽閣宮銘が何と紅心と出せんハナモア拂  
下をあそび且つ同一一部以上を拂はず、  
時代後れ甚しこト云ふべし

○前と云々青雲園勅刻全圖名鑄模  
演り落と比方ねじゆき複数人乞之化粧し  
今り修改と得る、幅三寸四分六寸四分許の  
本とて枚数約六十、印を取らう八十餘枚、表紙  
裏と左のめきに麻あつし、裏面另二へり鉛  
錫を捣つて之を又ねば青雲の色一人も飞く

松鶴司馬道文篆鑄  
往世吳送民

金

玉

印

金

富郎粉面做象炬手握駕五三印  
蝦籠朱敷擬閑公腰帶酒臺之章  
あくまうたよ、序又う支那の假傳  
とてやうと文へば漢文也、劉玄首人と云  
ふ人未以テ名へず、例言ニ極るよ、傳人姓字原  
俗稱駁雜也、不換鑄之口以煙幕中所呼其掌不

と有り、又三部の事多、尤優ゆと包含すること例

叙

曰、有一阿羅漢、燭碎如泥尊者者、西邊齋臘也。  
一日乞錫、大喝丐邦、峻氣呼荼、頭上栴頭糊  
鑿、偏袒右肩大笑、或曲採鉄鉢、默坐小帳  
焉、啓之其雅也、眼為之冷、見之其奇也、膽為  
之燭、吁篆刻、刻札、文人才子可競弄之一快也。  
凡形印必卑、篆書、妄刀刻俗矣、所以然者何  
耶、篆法立、以賜時殷、吉利、刀、刻俗如以秀  
鼎焚𦵹界、莫可忍為書、高具耶、彷云、  
尊者比茲印誘、何啻而逢神仙得之乎、尊者  
呵、大咲曰、勁陀三千世界者、盡憑白毫丈

明也、得諸南京本衙達、交當吧舍議平書  
鋪也、余拍手曰、極妙、在千此、勦章白  
篆、疑是大枝山寫、謹覲魂印平、果不  
爽、在新剝油舍娘深、粉條、忘花之跡、  
乃楊花名跡也、在于彼鮮長朱篆、將數  
瓣、金長兵印中、當不是焉、贊、輕紫葫  
蘆、牡丹脚香之長袖、最優家占排也、燒  
燒乎、優家唱男戲子之榮潤、而好古文雅  
之人、在索印之摸範、乃備矣、乃盡矣、勿  
謂他、堂要油嘴矣

庚寅冬十一月

靈光居人

卷首ニ家柄の印尾末に清夫の印とねあ侵入の偽称を掲げまことに於て貴(値)あり、刻もすこ住てましれども一時激動の凡ちやかに一巻が可まる。卷末に眞宗の跋あり、此方蓋の者逆の筆也記あり、余つ得た二種の印譜と併せて巻頭の筆もこと珍らしく又云此ち一枚錯仰山の書印を貼付す、家柄と號も別々とせらる。而も跡を以て之をう、仰山の刻ちまはる。さうして似たり、要するに改刪を以て終り。

岩崎家ニ一本を施すとちくに依り禱書を乞ふ

禱書をやんとす時を甲承りて仕り音  
け照合を要すと手。 七月廿日記

諸中の人名在り

|    |    |    |    |
|----|----|----|----|
| 家柄 | 半丸 | 芙蓉 | 睦友 |
| 舍柳 | 源江 | 喜友 | 百司 |
| 道乐 | 一光 | 十丁 | 利主 |
| 杉鳥 | 正吉 | 由男 | 梅幸 |
| 田雀 | 嘉七 | 四郎 | 和夕 |
| 澄多 | 雷子 | 舍丸 | 逸樂 |
| 東山 | 蓮仙 | 里虹 | 鬼童 |
| 杉曉 | 里聲 | 可慶 | 素桐 |

少長

幾老

里環

卑桃

魚江

李蹊

八甫

春水

舞鶴

金白

鮮長

天幸

三朝

是業

男女川

五嶽

慶子

東朝

圓枝

龜全

市紅

一興

鬼丸

咏之

一二

樽

珉子

路易

虎宿

一光

萬福

錦衣

由子

帰猿

楊子

杜芸

里江

井花

机四

弄花

岩止

其源

千陽

桐風

一當 古鳥 涅仙 李啖  
其曲 琴枕 一志 沔夫  
以上 九十八人

此等の多くは、後もいわゆる俳優とあらざつて、後もいわゆる  
尚附記す。北名著の巻首に、題名の五段の四書

東武 司馬尋 篆錄  
浪美 汪樞 薦  
洛陽 鷹維驛 輔校  
右之其居一大評判ト大入  
を居のうへくもきりことえりぬ

## 宣 言

歐洲大戰を一轉機として人類の歴史に空前の革命起り、爾來日に激烈なる文明の推移を見る、今にして戰前を見る眞に隔世の感あり、此時に方り世界の大勢を窮め變に應じ機に投ずるは國家としても個人としても急務なること論を俟ず、若し此の走馬燈の如き變轉を餘所に見て疎懶一日を過す者あらば、時勢は早く去つて其人必らず一日の敗者たらん、吾文明協會は之れを慨し早く大戰に先だつて、維新改造の元勳大隈候主宰の下に生る所謂る風雨に先だち門戸を綱繆する者、本會の起る決して偶然にあらざる也、本會は、大戰に際して頓みに雙肩に重きを加え平和克復に臨むで更らに又一層責任の重且つ大を覺ふ。

本會は發會の初めより世界の新知識を攝取頒布に力め、譯書を月刊すること茲に十數年今尙ほ昨の如し、而して時勢の益々急なるを感じては、百尺竿頭一步を進め筆陣に加ふるに舌陣を以

つてし、社會公衆に各種の講演を力むること又歲あり、皆な革新に對應せんことを庶幾するに外ならざるなり、若し夫れ東西の文明を調和し本邦の嚮ふ所を窮めんとする一事は、主宰の侯自ら身を挺して其衝に當り、多くの識者を會して月次研鑽を累ぬる已に二十數回、何時も侯の自邸を其會場に充て會衆堂に溢るを常とす、侯は起身の初めより我が文明を指導し來つて今齒八秩に及んで益々盛んなり。而して其の指導機關は實に本會となす、本會は文明の食餌を間斷なく供給するものなり、而して其の澤に浴する者今全國に充ち識者は認めて斯界の權威となす。寄語す。此の激烈なる過渡期に立ち世界の事態に通せざらんは自ら選んで廢人となるの危険あり、苟くも向上の意氣ある人士は本會に來り投するを躊躇する莫れ、茲に本會の趣旨を宣す。

大正十年八月

大日本文明協會

文政場合ヨリ於ニ來れ地方、宣傳像を流す事  
詳説爲佈ミ撤く頃まで持又在のめし但し  
田舎向也

○前ニ久須義吉堂主とす事ノ自業の紀行  
及釣鈎を示さんとて之を揚げし。其後佛り  
受け一往するを得候。の和七年九月二十日淀河を出  
一六月廿九日浪美ゆ焉約旦す。二十五日紀行  
七年闰月五日かや。今左主八日御終之入  
ての郊約老過万に滿る紀行の文をねす。祇  
待こへり。此も闰六月八日主と十日。此行  
闇ケ岡とほし村上より葉記をば。其門とし  
東北へむろに出て、まえどと改教寺泊寺生

雪峰を既て柏峰一而し、更々来山を仰え。高  
山ニ入り、閑川に沿ひて登城。最初の所比  
紀行とぞ一とき、またのと父翁と仰ひしが、父  
翁とは戸とくちうたぬ一人施し。この之に  
ハ再復えべ娘終父子の行を細ねむる事  
ある。父の事は第一納を既に也。巻尾ニ  
跋す。此の施行の不快を語ること詳く。也。仍て  
お物と紹介。行の後で附すと云ふ  
ある。文もあらへ難く。是もつ下也

八日(六月)戴日生而出、平沙斥陸、踰翠閣、祓方峰、絕田中至中村、彷彿一川流十有八涉、大澤至葡萄山道也、安之登降、北駢與蚊。

九日鶴鳴又登降長坡、接村上、市鄧稍憩、城隱見山上、崇墉高々、土人多以茶為業、所遇茶場過半抵塙谷、有渡置閭、沿印渡者之掌、渡卒檢掌始渡、六一奇、路皆瀕海、沙礪熱甚、馬子為道于松林、雖免熱沙之苦、而林樹茂密、不得微涼、亦復窮而棄也。

十日諸路之所經、無如真野、買舟、次新鴻之為便、辰初抵真鴻、乘船下轟沉川、久旱水淺、嵌之樹沙、丹子為候飯後七奇事、世之所傳知也、以

雖予哉無風改也、大人不欲見之、日昳次新鴻、六地之要潔而一聚之雄也、薄賣之利、共酒田伯仲、是片翁之鄉也、擬叩亭主人、得翁之孤萬而相見、美玉君然亂片先生、而不識貴化、夜摺舟子立主小酌夜市。

十一日辨色而出、路又沙砾、僉後程乙村人、一行三人之京、道路之間、詰談漸熟、遂情好相投、統為同行、飯于赤椽、往鵝嶺、投旅旁、二駢俱山脚。

十二日有峻坂、寺徑泊、飯于云雪峰、亦一聚也、其作渡艘、凡羽林皆渤海、而港澳之運繫巨艦者、羽而酒田秋田、越則新潟、云雪峰柏崎數處耳、宿柏崎、船門里許。

降

十三日越糲波、山道也。嶮與葡萄等。糲崎、柿崎二駅沙尤深。凡涉海涉駅，人貪步潮汐陶沙處，以沙濕不熱，且足趾不沒也。獨糲崎柿崎二駅，地勢不得步，其沙嘴沙磧毒熱如爐炭燭灼，困亦甚矣。此間二三里，通呼村瀆。村夫馬隸，皆以屐為鞋，是防熱沙沒踵之苦也。屐製衣無齒，為鞋釘，晚投黑井，沙磧尽于北。眉跋始感炎蒸之間，得一詩覺矣。炎熱沙深二三天，無林樾，取微涼，縱吾鐵脚或鎔却行在治人火炭傍，蓋寢踰也。古人黃生詩云：三朝又三晝，不受輕負成終。蓋嘆咤其艱也。古人富北越路，不知定為劉朝暮乎。十四日往春日新田到高田，櫛原狀都爲午道。石刻字云：北走加賀之路，直行去郭，經數村通。

聞子視大人甚悅之。及路殊踰，大坂曰大田切。大坂曰小田坂。投閑川，六山驛。

我以觀嶺為志久矣，嘗持裹糧者數，而世故趨避顧莫之遂。力憾勢窮，眷志而往，非夫。今茲余始奮而決策，友內亦憇憇而贊成。迺使第三赤松、圓卿迎翁翁。翁即至，寘四月廿日也。余就膝下，請濟勝一事。家忌太甚，且曰：我懷志一甲子猶一日。今髮毛皓々，其嶺雪乾，亦未為晚。汝寬勉旃。粵卜日，以上達。訪友皆未貸，趨而及予。岳寄窮東奧之勝，故特從臾焉。片羽及鳴門子琴，詩以贊行。赤山玄乘共招飲饌之。士德同舟送之平安，皆極窮送。以廿月二日起程。

閏六月廿九日歸、其間不滿一百日、然閔東之勝游盡。  
富山之視為冠、而竹島之月濶之烟、俱足承親懽也。若  
大治之觀、特可異、今而顧惟、奧羽之遙則彼其慮、阿  
古野松者非耶、從一蒼頭、隨從親於數百里外、豈不  
肌革倅慄、毛髮若條耶、獨家君之賢鏠、當絕險  
陝路、未嘗有難色、是以驚怯如貧、忘羈愾之懷、  
愾而無夜不甘寢者、亦實家君之賜也、凡北行人多謂  
千秋將有為乎、閔東不知我一素在成、親志也、先  
慈在時、恒憂家君之老、將至且撫慰我三人而瘡痏為  
瘻、為之是逝、已往九年、今我在而識家君今之情、贊  
卷之何、余不肖、不並承親權耳、余去幽客于浪氣、  
不得拜掃堂域、而親告之一念及此、立內心列衣、方

弟万歲十五在家攝時饗食、迺更貢納之便、秉筆  
親縷、使其代宣捧奠以告此行往還之時日、并  
詣後勝概

明和庚寅七月既後 莺州狀原賴染矣、印惟密書

○余曩在大魏李仲璇孔子廟之碑、一帖を得、之れと寶珍花、一時に披て見て樂むも、次第又  
一帖を書坊に見よ、卷首に篆額を取て之れ前  
に得た帖と書き所とある、則ち又後じうす、  
而く對照する後で得たの有る篆額あるもの外、文  
字も鮮明可いし、他の一帖は模糊井し難きもの  
之れに弁して得たもの後である、又前の一帖は次く所

のを之れに備つるものあり、大体これに後で得る  
より優る所あり、唯に一漏點も文字の全く磨  
滅する前の前あると磨滅の終其跡を有し、若干  
の文字あることを表すもト及し、後あハ紫漢の  
際之れを有きト、文字を糊として吊る縦字あると  
系の痕跡を文章と呼ぶに大切也、仍て重複と解  
せず二本共に架中、石母口、彼是巻勘に便する  
こと、やう

大正十年八月六日手記

附記す、篆額「魯孔子廟之碑」六字を未  
何人の手によるを考ぐず、筆名致能を於  
たはれども考究を得ん、文字弱く秀古  
ヨリ古雅人の方の寫物であるが、其

椎井也

の大江廣河先生之書、宮祖父の名へよむせに仰觀之  
此を以て先御うらう、余万々玉壽の家と高海の  
かゝり行山帳を見る終に刻裏を得、次者改狀  
之成、五年に巻尾に書也ニシモヒトヒト、五其  
の豫稿二回

大江廣河先生之書當乎家授也法於曾祖父  
文仲君故弟家支居其跡此帖即其一也廣  
海七年徒京都以和既也予書紳間花  
傳主于一時墨絶而多傳世而多失り其家  
象外多所見且比他法萬鳥不道勁古

揆惑亂其真亦可謂也。主領市邊是也。一元  
廟堂有榮顥之色。因刻言以誌之。但無  
款識。多後人所加耳。向後有此乾卦。  
余為附墨。以啟之。辛酉八月初三日。在京  
郊外。重復出局。

五峯改之恭

萬曆長文仲嘉十一年。此帖未署序。成化  
丙午年二十二年。也。世子。大。有。者。  
年代或難考。故係注之。恭又謬。  
五峯不流之疾。確。北。此。點。稿。在。或。遺。稿。與。之。  
從。錄。一。了。之。恍。然。

八月六日手記

○前略。而。生。逝。の。碑。表。面。の。文。字。を。滿。洋。子。揮。

毫。也。而。是。之。像。固。上。可。不。与。之。前。有。行。數。狀。流  
之。得。之。留。奇。而。島。花。生。死。之。處。之。云。文。而。之。碑  
陰。之。行。跡。之。深。多。之。之。固。而。花。祠。之。薄。而。多。之。老  
之。政。向。而。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。  
之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。  
立。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。  
之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。  
自。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。  
之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。  
之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。  
之。碑。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。  
之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。老。之。

て見え、三十の合角の字とすと三十四字度十一行ひ  
三十七四字を箱する此後う大体も、がむも、二寸四  
方の字と三字と四十字を字流すに行 千二十もあつ  
すよけん。じたこれとふと美す、行跡を極め大  
きの字のふと紙すと止ある段向也あら

のあら前ほゆも、追う船ひよまに時よ計  
候天し船ひよまに至本の船えうと無事し  
こえに、満生既具とよもげに、以候いあつれ、女  
節京山と牧之のよス船一及へ、あ山の候と馬  
學のよくもくの中の馬學う事候と胸志で可  
と間へて邦向う、後世家向れう其内の一云々<sup>ノ</sup>  
ことと云ふことを聞くと、あ(方邊)のよもよも、あ(方邊)

心をすまうと芳家に入り込まぬからぬ、邦向の志  
新も多合さんるをよむかくも、直後家と  
あしとえも翻のどもいあらう、あ時を窮心あ  
び翻のう是東うきうに済ひ、玄修、文う多福教を導  
じと云ひて時ひ、馬學の初身の源平ハまふ頃心あ  
ひハ吟ハれぬと多くて斯の志既と抱へれものとぞも  
送り後も強き升復えとや言一の極に思ひ、一九  
う銀後と下つて序と信紙の続る秋山く施行  
と行ひてみ北の秋山を破後く席してのう則  
南(北)部の松林である、北ゆひては邊瀬とも改  
味ありと見えね御主のよもと該海と城を

積みかねずおうせの地へ行くものあるとしむる  
生じみると言ひ、北秋山紀行より十九の傍よも湯に長ち  
てのうえゆく。あはれの御体をもことえんは其のもので  
御身と御法と御手の御みまつりとおき、冬と春とえ  
て家ねをあわやうぬぬ月捨てるもすみ  
差支えうとえ、但以雪松の立きある三疊の一  
ト向井に女児の草局とて三疊の入に疊一  
疊はと枝あくまでよ、上えうまいりとあるも  
可也こり、其御と御の弱病や肩あとの者

又も人差し江家旅中よりあは、之れを改めんが為  
す難くそんといひ、引る道地のあることを、  
毎と聞てもあひ自分の腰と股をましき  
七、家旅中よりもあひ、父御神代裏御の旅中  
車も肩も痛みあり、斯く、肩痛のまことに知  
らず偶發言ひ少しは、自分の胸につき、引く  
改らすも別に兩例とて、その二事もとも  
よ板あと、十七差支あるも、よきと候、早速  
よきと往のこと、ハラカチ、差し引くうのこ  
よて、あひの効驗ありとすればことなるせ  
のゆせ  
○蟹の泡とも魚を嘗して早大坐脇部をも出

版さんとて西洋文への急流の數十を蒐めまする  
未折角現代文ももとより増補られて  
どう行とも多く氣を要ります。其處おまえおきし  
お出版部へ送られて此種まで十件ひきし  
增補し、飯田俊雅とて文革する技をよ校正  
をだまると共に排列の順序、オを一切れし畢  
ぬ。日暮沖印刷にて秋季にて多く手のりる道  
みは幸也

自今、おもて觸れどもさかねてよし。又  
朝山陽の急ぐて刻むるゆめの、もす、段  
是も集めどもは或くや冊とすまし、哉の  
自分のもとへとあてもう多く母方に流布

し居る程々の版手々無きゆめのと全く自家  
の穿鑿に傷みすのうへ、早大出版部の  
セリース(即ち鑿の泡と因してセリース)中  
スかくは差支るキ放ふ思ひる。日本文人の乞  
うとあつてゐる「文藝」一文書セリース  
のゆきかへて出版する者見えども、山陽の分の  
みうち日元三と引くと別に一冊とするべき  
が量也

○出版部増資のゆめ本巻の首端はサウト  
社も、えよつき船の荷物部の紙も含むと  
聞こえ、付属のま、大体と前記のことく  
うちも十萬円増資を二十萬とすること

本年四月上半季利金の内もと立番日を先づ  
既に予定通り配り、残るを以て二十号の四分  
一拂入とあります。古事、但し博望本年十一月の  
室時、俗人食を待つて行ること、尙ほ出敗部  
八割満三十立身とあるを以て、二人を薦  
りし所居主と幹部の後見に配つこと朱に付  
人玉義子(約立日)と配り、大名書教領  
酒肴料とし、使役仕事もまじめせし千円  
を給す。在候貰金を領つの決定をへ未だ  
古前三跡の様食をすむ也、いづれ主吉の豫  
定あり、生辰御の一迎歩也

卷之三

左散策集中細めの文を取て大抵を少次のむ  
揮を得、墨淡、文墨が餘る事多めに見え  
とす、大抵固墨譯玉の冊と呼びのものとす  
筆の新刷のもの故てみとすまゝ三行  
川流席のものと同ひ、多くは  
法華と圓も載り、獨り跡とすまゝ三行  
想すに比収木元いはく數、文墨が餘るの巻  
西徳三年、刊行しあり、價二十日也  
○門田牧南芳庵山の門人とも後藤山の也、卷をと  
ふ、余なりうる標的の書時と得之れと双魚をこすまゝ、而  
も舟詩とえす、序ある柏翁の集を得、柏山房の  
評傳頃、次む今坎の施にて標之者、安金也

後有往來參山之請焉」、復惠凡言「余大江實  
す、今四五日採得一丈半宣紙、每張七兩半」。大江斗  
八月京都修家之行記

山村喜至

二月東北入松衣、四郊晴色、雪消春煦、晚童放鵠  
總離心、忽向天邊顧鹿元

琴大

多雨千群沒影漁、色冷一照舊看網、含情他旁照  
河梁別未伴、驚卿忘向南。及典何事得春

初夏新晴

蛙聲帶爽秋、盈田槐葉成陰樹、引極新晴無無  
復無暑可人風、夏初天不愧主人

施彷  
故人退、天一涯、有誰存、後流離期始知為宦維  
私累、立種家未之時、友人送被書、十四家亦生亡古  
江郎月未升、隔岸夜烟凝、軋、少柔櫓、歸遙一照  
快

古山大夫杜顧

高懷空自負、全忘、夙朝接人情、亦苦勤、勸酒愁無盤  
味好、繫鞍幸有柳條長。亦舉山家法

蚌蛤石吟為室玄甫

奉名化為賓、斜窗、摩拂人歡是、新奇、畫底錦  
背供金玩、口吐珠、子細不知、寄於國、恨非尚、能研言

宿山寺

佛殿峰深像翠微  
烟少雨歇峯巒忽如身在天  
這局半夜不方生月神

喜友人左家以

高揭歌為喜逢印月唐金波星共仰  
燭暗不知何處鳳凰城

雨泊

渺相湧々浦空溶雨暝歸舟古恨重江頭甚羣鷺

如何寺宇未蓬裳夜鐘

湯泉雜吟

浴後乘涼步小湖鐘響古寺夕陽收漫湯入間飄烟互

一縷涼風傷岸草漪

城傍曲

深愁

風勁沙逐鶴西飛草枯原上兔方肥人無騎雪未  
桃戰閒去轅門未獨風歸

春雨

巷泥難訪杏花村細雨黃昏坐小軒  
怕殺學衣沾濕

甚一鶯鳴入柳條輕

曉晴

夕陽晚逐野鴨口客多懷舊木鳥將宿淺灘魚亂

飛

暮夜雪詩

枕上孤燈照夜深林鶯啼微曉雪問  
去不許故眠夢到山

大風詩

浪年游漫集島田子彦船

不識何處駐桂枝北至南尚湧足薰冬中佐慕惟卿友  
舊意承君兄弟情絕唱可和南不同鳥北不尋春也

舊意承君兄弟情

絕唱可和南不同鳥北不尋春也

西馬

踰越何紀非逾遲十年惠養脫銜羈仰言一去是無用  
汗血酬恩或有時 漢厚中具有肯力卓平可存

○別局と刊りに丸号解やかを多めたりる漢書  
の記に比被天差と云ふが後と後んじては天体の後  
也記す事多しにまえ天文学の記の層づくめの高み  
興れども、おうへ感しにゆき夜這星の多く  
えう下るエロスとよぶ者もあつてゐる。金井氏

早とち太陽経の軌道は内移する所直前があるのなら  
他の星とあつてこれらが湯裏を時々軌道と脱れ  
地球を近づくとする。そこで日本から夜這星を云  
ふと云ふが因る名は附してゐる。西洋ひまえ  
法の用ひ及ぶ性懶と因める説がゆきゆゑと云ふと  
これうちエロスと云ふのであるとけむり一矢す  
紙の内訳で此時より以てさるのとすと云う  
世西洋の説である北波太平洋を敵と  
今は半身の紙より紙の主張とうて楊け  
ル電報のゆゑ北波う引用しなつてある  
ル。

の先頭東北の湖にて、四五人と会合し、此時奴を  
抱き、殊後馬鹿言ひのうへ走り、とて、一枚、  
余の馬鹿紙、筋、筋抗を試み、  
人とも其實驗筋、とまことちづくと、そんを  
残り歩じる事あつた。

ちま人汽車、旅行をやつて東海道とて、  
車中、一婦人の姿、艶めし、かわぬやうに  
あり、別日、彼女も無いやうに、婦人らしきが、  
ひまい文、一人の、ゆと、うつて、泥津にて車し  
因、旅館あることを、うつて、居心の方ひと  
立ぬひう道連れ、ひう弟、うぬびの男の

あらるまゝ、室を異なすこと、うつて、  
その室うち襖を開き、隣接へ、此の婦人を  
四十の娘と詰めて見つめ、四十男もし年、  
多めれく、此娘が、長けもあらずと、  
向て就くと、直ちに、年代を勘定してしま  
やうやく、彼優心付とすむやう、男の娘とも、  
（高までも平氣である）、あり、うつくの娘、  
弓流の時と稱して、とても、うひよも、陽て、  
（就ひて、男の方ひも、あつり、情思て、仰せ、  
此の婦人男にてねね、あく、或ち、お取つて、  
ひあつて、ハ、ちひく、危ぶみよ、ひそひそお顔  
や崩位や崩く、着くと、遅早く、金をえぐる

二教直しに娘子をひしてアモト、まとうあれり  
とあるのまへと胸や自問自答も深更も  
マジシリともせず梅じやくのうと、久矢と  
隣室もえもねうあくと仰つて、うとう端を  
いますしうとえ、う一儀すみはすお生トさ  
と巻つて、こゝの雪あと紀しか、さと死郎人を  
何あきまの男ハ問えんと一聲を逸早く帰人  
うじうじ行しの名と聞え下さる。私し  
りもあるのあれ前を仰えまぢんませえ  
う同じ汽車で東京で帰る途中が、東京駅  
一筋一筋、私一々挨拶をして下さる。因  
くわやえども共は帰金(このれき)東京駅

ニ着物(アラヤ)男と婦人の柄あるあることあ、素  
和あ振り駅に入つた。あ、うづねじある  
ふだ先角(アカツカ)うつて、蛇婦人の母駅に着  
して、この行動せんせに注意(シテ)めど、二人の主  
流のるするうゆくへとあして、奥極(ウタク)  
と教説をもつて、うよく漸やく其の事はの  
地位あむものあることをも判しきり、其後又  
キをほそもうつて她的(ヒタチ)出合ひぬふと  
こんな流(アラヤ)あは、軽(アラヤ)珍らしくもまじう、その  
五ひよ姓名を名乗(アラヤ)全くば、殊(アラヤ)婦人(アラヤ)の  
ことを提案(アラヤ)所(アラヤ)氣枝(アラヤ)ある  
○湯(アラヤ)宿(アラヤ)う乗(アラヤ)、う帰(アラヤ)つて來(アラヤ)金(アラヤ)を

みれり、難役中例の半月詠味の馬鹿猿じ笑ひセ  
ル

或る青年来西のが私窓子を買つてあり時ち年の古  
希う主のいある、どううおのと麻病とうつして  
くもよと主被れより女も不審う思ひめどにう  
きの犯角をひきことう出来うこうと、女犯角  
ち此のち年うする人、後つといふ解、つは此  
のち年う身を寄せしある某家の夫人う放  
捨日高也、良人へ隠してもかよ往來しもする或る  
牧のと私あしるる、此のち年を税ま之れを  
切り切連して主人のㄌり復讐とーといひものと、  
りうく裏しに其復讐乗う引もあらばづ

溪童歸うう自、悪病を受け、こう家を离  
してゐる家婢こあ下し女の床と移す、家の  
主の家婢こあ通とてゐる事、並えう主の移  
主の主のとあて移す、あ、そんと牧のと  
移すと云ふ、間接の過駿取ひ、間接又間接の  
復讐とーある

えも流とるまあうきうももの、米四の家庭  
の情里ゆゑを思ふ、主の危きもコシナのいあ  
う、  
毛痴けいを身みとすをよ葉はとぞう

のほゆも遙と、以て書き草くとも長生新浦しん島の

一冊、樹に根より茎の主を入るに止り、出るるの前り船  
えどまく範へんと替ひまうとせり偶と渭間の事  
とさうて一石青色す、御とくと文豪殊のことし  
此の事と前よりけりと仰曲やの月輪日暮後の一物  
上下ニ幕と一月せりと又まの日令を因じ、  
前より五年あると歟りて佛もも老ももすと見え  
き也玉巻と云はれゆきめんと長生と冠らせて  
リ、浦舟かくとゆく述懐の事

昔父のめり、父のめりの主の事と我今とと思ひ出  
し、かくかく或ひと墨と近ひ、かくと或ひと形ゆ、  
おいばんよけり、片轡車の、足轡車の時世も、  
七八代あくまくおまわんへおろり鏡の碎けり

色くぬ芳へぬめく、さんかに浪の打寄する浦  
えどまくの浦えど、よくすかすかく、浦櫻、身立  
あへあへ、この上ちモ浦の、度の藻滑り思へ  
ほき、いやうつか一キ、わきひ子よこうとわん、  
疎めと穂かさうし、今は早やとこよふ、浦  
えも傳手か、せんまく、をよび給はるけり八重  
の限

○別府の町は泉都と冠せられ今社の祠堂と刀  
と、一茶の跡の跡と御と御と  
また酒と湯もありまとのあらゆる  
○別府城の帰途再び京都と主に奇羅着と京と  
をもつて日振聖教をすと觀る卷首と七佛の

像の拓本を載す。え善き拓本無き本多也。跡し  
字のり拓本多也。僕る二十日とて、將へす。此賄  
入れ多と後身の是也。此拓本ニ皆家有らず。無き  
所う。一ち天戸門四邊の邊より。殊れど既自らの筋  
え也。此の敗本多る。以御事。あまよ。もし。此  
ありと。今。得。と。舊拓也。他の一帖も。ある  
の。竟典。ト。楷書。ニ。書き。と。す。楷体。並。重慶  
人の。も。と。ぞ。と。と。と。と。と。と。と。と。  
そのう。断簡。の。條。り。と。剥。い。と。跋。と。元  
や。す。珍。本。と。僅。ま。古。本。一。冊。と。得。と。と。と。と。  
り。走。る。の。行。幸。記。と。と。と。と。と。と。と。と。  
彩。物。の。絶。さ。く。教。と。挿。入。す。す。珍。本。の。確

とあつまひ

八月十九日京府。拓本

此りはひづえの極。多。り。も。二。三。名。跡。ニ。重。高  
す。自。の。印。と。か。見。と。ま。る。と。殊。く。し。く。國  
に。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
院。内。と。二。宇。の。屋。金。多。共。と。先。帝。の。美。式  
の。像。の。御。車。と。れ。念。と。と。と。と。と。と。と。と。  
觀。し。と。大。佛。殿。の。佛。像。と。寶。殿。に。弱。部。の  
多。收。り。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
舊。佛。像。の。蓮。座。と。化。焚。體。の。断。片。若干。并  
に。焚。火。を。失。う。れ。ば。少。佛。像。一。基。を。脱。ふ。不。る。  
き。もの。也。此。事。を。め。て。太。丈。の。旧。佛。像。を。も  
像。す。よ。確。と。玉。難。れ。う。し。と。思。り。と。此。の。佛

像ハネ吉多シニ引レ震災ト罹リ終ニ田禄の  
尖を受ク滅ニ惜也シ、田禄と急にえを側の  
田家安原の刻家も大鐘を以テ之を支く  
力もあらずやうとも素の・強き者と見也す、  
此鐘は金味・大佛焚劫の断片の金味と  
似也、流れに柳山時代の精を極め畫て候ま  
とうるべし、八坂塔カ此があく見也す、え  
千年前の達道あらう、家並ニ此の塔の材  
を以テ研画す、差し修復の時舊  
能の木の板を以テ取外し材を利用し  
收り得也、此の研画を珍とすの既後を  
御観らま可也、清め寺仰ニ仰ぐ仰のこと

くもんと山東山に面す登坂すの跡を廻リ一  
捷と巣り立ツ登るまちと便き、もと梶原を根  
一弓年を過ぎとくつよ、例の忠懲堂尼ミ  
總も彼の元姫る他在と聞くハ一弓年前  
廻し立ツとて、姫の名もへりこころのうこ  
ゑんとさんか大限候持手ス解、これあま下ス  
立ちゆう例の姫也、これも前年全モ候ふ時  
行へん東山を跋渉セし時の事とてもさう恐  
持るに來りしも候のが菊池大筆頭(まほひま  
かわすゆゆ)と余りよ、京都の紳士を五甲  
翁もフロウナートで随從す、今此の  
言ふと又まほ侯の後ろまばたマ帽を冠り

よや而御の現るあるものも、これに金を先  
ハ日早くおとせんしとえまをもあつまつま  
〇今次立御御在中の椿木の四索大丸兵助店の因  
禄の失ふ程うりことせたる相玉時半に施設の主  
帰う寝あとす、大丸と江吉とあらわき  
則め紀きし施設屋上のれ干甚と上日暮が案  
の一角火災沖天、早や尾根をすへて焼け  
ち、さへもれあしましわ木炭のものとて燃燒  
とたゞ四立の壁もぬき、着きく全部と燒き拂  
ひえきは復く、鳴鈴何が大丸と不  
幸きの数年前と大段の間し店大災と窓  
リ未だ修理をもとまでもある、下打

主とあとも先の日其後疾に卧し未だ回復  
せず、終日(てあひ)利り張出さんと久しゆま前  
の別府入船く金政東御と主事のうどんを叱  
めと併のし大丸を訪ひしもと下村主と改  
私第にゆかぬる、ゆゆゆきまくさき  
朝(ゆ)きよあまねに何をも持てて鳥丸印  
河のうの仕業、立うる車を起つて鳥丸印  
印(いん)りゆくも重複(よ)やと主人を圍むて待て  
て用てみゆう、或日此の一枚(共)高(たか)と重  
つことと見ゆるときをりしが、幸ひに立す御く回復  
へつてありてえ氣十尋(じゆう)と見ゆる



鯨波福浦の窟々穴

(福浦町鈴木湖影寫)

郷の  
涼味一  
掬こ  
ヌ取る  
の外お  
の具と  
あす

此のナニと云ふ事は、莫御の俗傳の大の山、  
大穴の火を焚くの日を、恰うも其日大丸  
う先駆をさげて、さるま國、あそそまへべき歟

雷津八  
日くアガ  
者ひと  
作ひ  
城翁自  
作、如  
く行

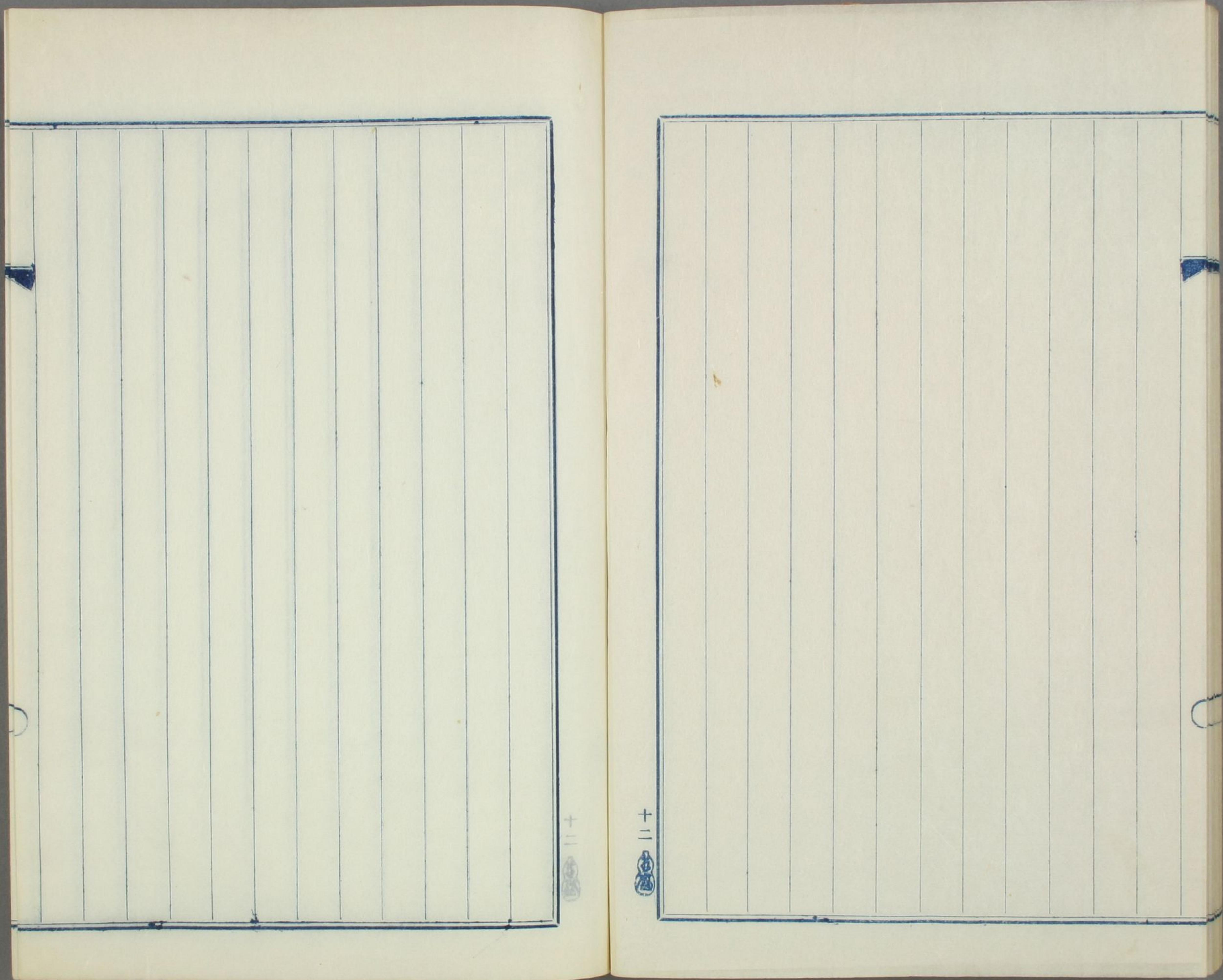
〇はゆきと過う一旦はうま前略あ碑文ニ湯通し  
うぬち前と取めん類る抄行をもへり、えよ掲  
つて年立行と主てにあひ是の又ちたゞ其の日  
草の下  
頭のれぬといひある、字数うねまつる  
う抄行のままで色難をすまつて後褪骨  
われ比と見え十二三回もきりて初見も肉つれ  
とえ、最初自今く、あ黒毛いあつともよ較  
べと鉢形とぞみれ、まざしか綴痕うあら  
極よ思ひも、こくまじえを立すく  
山容易ひき、何を物と前めり無い文体  
じ後世の人々がうやうやしくてゐる文  
である。現代の人が後もと何をきくやう

うきと極よ思ひも、まじい無けんがある年  
後の人々と後人ひ理解さんねいあく、漢文  
はも初も固も本詞をもつて書く所うちひあつて  
うおぬの本詞を譲り受けたのでこのりすぬ  
るがゆ、漢字を強すことよくつた、字数  
統計 卷のたす 実ひある

大正十年八月十八日記

こうは少しが郵便りけの大臣川上が  
あるとあればこせきであります。四百  
このへんから車を一通仕事にしに四百もか  
かう。ものにさつこはよくあるなうに  
えひよくやうであります。三日とてあみし  
かあせん大小のにもつよろんきへとおあす  
へるのあらへでいへえくにあらへ  
ほらせつがふといしめの新字のり  
せきくすいこくとく文通とづにしむれで  
ほらせつがふといしめの新字のり

じりが氣の船と  
このへんから車を一通仕事にしに四百もか  
かう。ものにさつこはよくあるなうに  
えひよくやうであります。三日とてあみし  
かあせん大小のにもつよろんきへとおあす  
へるのあらへでいへえくにあらへ  
ほらせつがふといしめの新字のり  
せきくすいこくとく文通とづにしむれで  
ほらせつがふといしめの新字のり



以下全て  
白紙

